

石巻市の東日本大震災遺構「門脇小」の一般公開が始まった4月3日、取材で初めて訪れた。印象的だったのが、見学ルート最終盤にある「心をほぐす」がテーマの一室だ。

火災に遭った当時のまま残る教室、緊迫した状況を伝える震災当日のラジオ音声……。部屋のベンチに座り、1時間ほどで巡った旧校舎や展示館で見たもの、感じたことを反すうする。

岩手、宮城、福島の被災3県にある複数の震災伝承施設を訪ねてきたが、内容を振り返る機会を設けた施設は初めてだった。

門脇小は、石巻市の被災状況を記録したパネルや石巻地方に何度も津波が襲来したことを物語る地層標本などを並べ、市全体の震災被害を語り継ぐ役割も担う。

市民の声を反映し、5年近くかけて決めた展示内容が評価さ

### ③ 震災遺構・門脇小公開

れ、優れた空間づくりを表彰する「第41回ディスプレイ産業賞2022」で大賞、特別賞に次ぐ優秀賞を受賞した。

展示に限らず、月1回の無料ガイドや語り部による講話、津波疑似体験といった多くの企画で震災を多角的に伝える取り組みを進めている。

全国の博物館学芸員の視察研修で今年8日に訪れた名古屋海洋博物館（名古屋市中）の吉井誠さん（58）は「いろんな年代の人が命というテーマを考える工夫が施されていて、震災伝承の役割を果たしている」と話した。

一方、石巻市の震災遺構には津波で児童・教職員計84人が犠牲になった旧大川小もある。

2021年7月に一般公開された大川小の来訪者は今年4～11月で5万6859人。門脇小のほぼ同期間の来訪者2万9643人の約2倍で、知名度は大川小の方が高い。

だが大川小を舞台にした企画

はほぼなく、市が積極的に活用しているとは言い難い。児童遺族らでつくる「大川伝承の会」は「共同代表で、大川小6年だった次女みずほさん（当時12）を亡くした佐藤敏郎さん（59）は、市の姿勢を疑問視する。」

「門脇小と大川小は学校防災という点で共通している。大川小も伝える場所なんだというのを市は再認識してほしい」

門脇小も大川小も、訪れる人は震災の教訓を学ぶために足を運ぶ。その思いに応えるためにも、それぞれの特徴を生かした有効活用が求められる。（石巻総局・松村真一郎）



津波と火災の痕跡を残す「門脇小」11月8日、石巻市

メ モ 門脇小の敷地面積は1万2700平方メートル。津波と火災の痕跡を唯一残す鉄筋コンクリート3階の旧校舎、仮設住宅などを展示する体育館、校舎北側に新設した3階建ての展示館がある。幅約107メートルあった校舎のうち、維持管理費抑制などのため中央部約67メートルを保存した。総事業費は約13億円。

## 学校防災 あの日振り返る